

「読書感想文コンクール」を 実施しました

葛飾区では、教育振興ビジョンの取組の一つとして、児童・生徒の読書活動を推進するために「読書感想文コンクール」を実施しています。

今年度は、小学生1万6千830点、中学生5千733点の応募があり、361人の作品が入選しました。各部門の最優秀賞・優秀賞・佳作入選者は次のとおりです。

■小学校低学年の部

最優秀賞

吉野 悠真(よしの はるま・道上小2年)

優秀賞

角田 桃花(すみだ ももか・道上小1年)

池上 清香(いけがみ さやか・金町小2年)

佳作

棒星 大喜(ぼうほし たいき・堀切小1年)

松尾 恵菜(まつお えま・二上小2年)

大久保 理彩(おおくほ りさ・原田小2年)

■小学校中学年の部

最優秀賞

佐藤 里桜(さとう りお・梅田小3年)

優秀賞

伊藤 愛莉(いとう あいり・松上小4年)

武藤 心優(むとう みゆな・原田小4年)

佳作

田代 希亜奈(たしろ きあな・中戸小4年)

秋山 日向子(あきやま ひなこ・東綾瀬小3年)

阿部 光李(あべ ひかり・花の木小4年)

■小学校高学年の部

最優秀賞

渡邊 小梅(わたなべ こうめ・松上小5年)

優秀賞

岩田 翔人(いわた しょうと・葛飾小6年)

青山 そよ花(あおやま そよか・東水元小5年)

佳作

松本 陸(まつもと りく・奥戸小6年)

小崎 とあ(おさき とあ・東綾瀬小5年)

松土 美幸(まつど みゆき・花の木小6年)

■中学生の部

最優秀賞

蔭山 晴菜(かげやま はるな・立石中3年)

優秀賞

十二林 愛実(じゅうにばやし まなみ・金町中3年)

大町 彩菜(おおまち あやな・亀有中3年)

野口 マリア アルテサ(のぐち まりあ あるてさ・葛美中2年)

佳作

矢作 萌絵(やさく もえ・本田中1年)

西山 ほのり(にしやま ほのり・双葉中2年)

阿部 達地(あべ たいち・双葉中3年)

伊藤 夏音(いとう かのん・小松中1年)

川上 真由(かわかみ まゆ・亀有中2年)

重野 なつみ(しげの なつみ・葛美中1年)

指導室 ☎(5654) 8469 (敬称略)



中学生の部・最優秀賞

「生と死を見つめて」

立石中学校3年 蔭山 晴菜

「お帰り。」
私は、父の「その日」を思い出していた。その日は亡くなる日を意味する。あれからもう四年。いや、まだ四年と言っべきだろうか。この月日が長かったのか短かったのかはよく分からない。父は突然倒れ、数日で帰らぬ人となった。今でもその日のことを鮮明に覚えている。

主人公の妻和美は、癌に侵され余命宣告を受けた。いずれ訪れる最期の時を、二人は「その日」と呼んで過ごしていた。
最期の旅になる覚悟で、二人は電車に揺られ、新婚当時に住んでいた相模新町へ向かった。思い出の地を巡る旅。「ここから始まったんだから、もう一回……ここから始めたいよね。二人は涙を流した。きつと、僅かな望みを抱いていたのだらう。夫と子どもたちを遺して旅立たなければならぬ現実。できることなら、一分一秒でも長く生きていたいはずだ。でも、刻一刻とその日は近づいていく。正面から死と向き合う和美は、本当に強い人だと思った。また、家族への深い愛情と思いやりを感じた。一方で、妻を守ってやれない自分と、どうすることもできない自分と苛立つ主人公の気持ちの痛みが伝わってきた。胸が締め付けられる思いがした。

四月の肌寒い雨の日、とうとうその日が来てしまった。和美の願いで、病気のことは子どもたちに伝えていなかった。でも、健哉と大輔は薄々気付いていた。毎日が不安で押し潰されそうだったと思う。どうすればいいのかわからず泣いていたのかもしれない。「なんでママだったんだらうね。」健哉の言葉が私の心に突き刺さった。いつしか健哉と大輔に、あの頃の自分を重ねていた。私の父は人徳のある人だった。優しく自慢の父だった。それなのにどうして言葉にできない感情が沸き上がり、涙が溢れてきた。死に答えなんてないはずなのに。私は主人公と同じように、生きてきた意味や死んでいく意味について考え始めていた。
いつだっただろう。私は母に、「お父さんとお母さんの思い出の場所へ行ってみよう」と言ったことがある。「いつか行こうね。」母はそう答えてくれたが、父を失い、どれだけ辛く悲しい思いをしていたのか、今ならよく分かる。私は心がざわつき、思い切って話を切り出し、

謝った。「大丈夫よ。今度案内するね。」いつもの明るい口調で言ってくれた。母は本当に強い人だ。どんな時も私を受け止めてくれる。母がいつもそばにいてくれたから、ここまで来ることができた。支えてくれていた人が沢山いること、今ある幸せは決して当たり前のことではないこと、そして、今日という一日がどれだけ大切かということを感じさせてくれたのも母だった。「思いやりを大切に、感謝の気持ちを持って生きて。」母が常々言っていた言葉が頭に浮かんだ。

和美の死から三カ月経った頃、主人公は師長から手紙を受け取った。そこには、「忘れてもいいよ」のたった一言だけ書かれていた。和美はどんな思いで書いたのだろう。始めはよく分からなかった。でも、何度も読み返していくうちに、その一言が私の心にすっと沁みこんでいった。本当は、自分のことを忘れてほしくないと思う。でも、時間というものには断えず動いている。遺された人は、これからどんなに辛いことがあっても前を向いて生きていかねばならない。その一言は、この先もいつか前を向いて生きていけるように、三人の背中をそっと押してくれる優しさで強さに包まれている気がした。そして、本当に優しい人ほど、強い心を持つてくれるのだと思った。私にどんな手紙を遺したのだろう。父に思いを馳せたら、きつと、同じような言葉を選んだらう。いつの間にか溢れた涙は乾き、温かい気持ちになっていった。
いくら考えても、人が生きてきた意味や死んでいく意味の答えは出せなかった。でも今は、それでいいと思ってる。主人公に言った師長の「考えることが答え」という言葉が私の心を軽くした。もしかしたら、人は悲しみと共に生きていくのかもしれない。でも、時間が流れてその感情は薄れて形を変えていく。故人を思って涙を流したり、思い出話をして笑ったり、ぬくもりを感じたり、繰り返していくのだと思う。この先もずっと、父は私の心の中で生き続けるだろう。

この作品に出会い、新たな一歩を踏み出す勇気をもたらした。ゆっくりでいい、一步一步踏みしめて歩いていきたい。また、父の死と向き合い、生や死を見つめて、改めて命の尊さや大切な人への感謝の気持ちに気付くことができた。これからも大切な人のことを思い、考え、しっかりと前を向いて生きていきたい。
優しく穏やかな時間は流れ、私はそっと本を閉じた。そして、心の中で呟いた。「お帰り、お父さん。」と。